

## 東南アジアの民族

東南アジアの大陸部は、全て北方から南下してきた民族によって占められている。大陸部の中でも最も西方にはビルマ人が、中部にはタイ人、ラオス人、クメール（カンボジア）人が住んでいる。そして東部はヴェトナム人によって占められ、マライ半島から島嶼部にかけてはマライ＝ポリネシア語族系の人々が住んでいる。

紀元前 1500 年頃、南アジア語族のクメール人がカンボジアのあたりへと南下してきたために、マライ＝ポリネシア系の人々がインドネシアやフィリピンなどの島嶼部へ追いやられた。この後、13 世紀頃までの間に、シナ＝チベット語族のビルマ人やタイ人等が次々とインドシナ半島南下し、現在のような民族構成ができあがった。

## 東南アジアの古典王朝

メコン川の下流域は海の道を使った海上貿易の要衝として栄え、1～7 世紀にかけてブナン（扶南）という国が建てられた。メコン川デルタのオケオ遺跡からはローマの貨幣やガラス器、インドの仏像、シヴァ神像等が出土しており、この国の国際交流を物語っている。

ヴェトナム中部にはインド文化の影響を強く受けたチャンパー（林邑 後の占城）があった。チャム人が建てた国で、中国と朝貢などの関係があったようである。

メコン川の中流域にはクメール／カンボジア（真臘）というクメール人による国家が建てられ、9 から 12 世紀にかけてはアンコール朝として統合された。この国の王城はアンコール＝トムと呼ばれているもので、アンコール＝ワットとともに有名である。

ビルマには、上座部仏教の普及に努めたパガン朝があった。

スマトラ島の南部では、海の道の要綱としてさかえたシュリーヴィジャヤが建国された。この国では大乘仏教が栄え、義浄がインドに渡航する際に立ち寄ったという。

ジャワ島の中部には大乘仏教が栄えたシャイレンドラ朝が 8 世紀から 9 世紀にかけて存在し、ボロブドゥールなどの仏教遺跡が発掘されている。